



## 病院経営とパリアン (11)

医療法人パリアン理事長  
川越 厚

### 病院再建のために具体的に行ったこと

#### 1. 周産期医療の立て直し



賛育会誕生の翌年（1919、大正8年）、現在の墨田区太平3丁目に、日本の庶民を対象とした最初の産院である「本所産院」が開設された。爾来周産期医療は、賛育会病院を一貫して支える大きな柱となった。病院再建は周産期部門（産科と小児科）の勢いをどうやって回復し発展させるかにかかっていた。特に、慢性的な赤字を作り出していた小児科をいかに黒字部門に変えるか、が大きな課題だった。

#### 周産期医療の立て直しの哲学

周産期医療に関連して病院長として私が常に考えていたことは、「ひととしての誕生」を賛育会病院に復活させ、現代の産科学に対して一石を投じることであった。

母児の安全至上主義に立つ現代の周産期医療では、「いのちの誕生」と言う人間の業が非人間化され、科学的かつ合理的ではあるが、医師主導の機械的な出産が推し進められてきた。このような考えで行われる現代の周産期医療をもちろん私は頭から否定するわけではないが、周産期医療で人間疎外が行われていることに対して、私はいつも問題を感じていた。

紙面の関係で詳しく記せないが、この考えは、病院長就任前に在宅ホスピスケアの洗礼を受けてからますます強くなったと思う。歴史ある「お産の賛育会病院」で、人間疎外されない形の出産を実現したいと私は強く考えたのである。

出産における人間性とは、人としてのぬくもりのある環境下での出産であり、そのカギを握るのは助産師である。周産期医療の中で、助産師の力をより多く引き出すためにはどうすればよいか。経営改善効果はないかもしれないが、重要なことだと信じていた。

なお妊娠出産に関する私の基本的な考え方は、賛育会病院長時代に上梓した二冊の本、「アクティブ・デス、岩波書店、1997」と助産師の松岡恵さんとの共著「妊娠から出産まで—ふたりで準備、婦人之友社、1994」に詳しく記している。

#### 産科部門の具体的な方向付け

私が病院長に就任した時、賛育会病院の産科は地域の産婦人科医と連携を密にとりながら、定期的な

勉強会を合同で行っていた。この病診連携は吉田部長（当時）の発案でスタートしたのであるが、勉強会には地域の産科開業医が多数出席し、レベルの高い議論を交わしていた。吉田先生は東大産婦人科医局の大先輩であったが、副院長と言う立場で退職するまでの間、私を本当によく支えてくださった。先生には自治医大の助教授という経歴があり、しかも親分肌の方だったので、この会の学問的レベルが高く盛況だったのも、当然と言えば当然である。先生の退職後もこの会は継続された。

吉田先生が退職され産科医師が大幅に入れ替わったのを機に、私は新しく赴任した佐々木部長に、院内助産師と共に開業助産師を支援するシステムを作るように依頼した。幸い、産科病棟のスタッフも私の提案を前向きに受け止めてくれ、そのためのルール作りが行われた。

こうして、妊娠初期から分娩に至るまで賛育会病院の産科医師と開業助産師が協働で管理していく形が出来上がり、学会などからも注目を浴びることになった。

このシステムに込めた私の思いは、以下の三点である。第一は、助産師が前面に出て産科医がその働きをバックアップする



ことで、人間的な出産が実現すること。第二は、人間的なお産をもっとも意識して実践している開業助産師から、院内助産師がその精神と実際を学び、賛育会病院の助産のレベルをあげることに。最後にあわよくば、賛育会病院で扱う出産数の増加を見込む、ということだった。しかし残念ながら、第3の目論見は外れたと言わざるを得ない。

#### 小児科部門の黒字化

お産を看板にしている関係上、小児科はどうしても賛育会病院から切り離せなかったが、小児科が経営的に賛育会病院の足を常時引っ張っていたのは事実である。それでも小児科をつぶさに見てまわった私は、慢性の赤字診療科を黒字化できる、と確信した。<2ページへ>

<1ページより>

そのカギを握っていたのが、新生児集中治療管理室 (NICU) の新規開設だった。幸い、小児科は保科部長を中心に医師、看護師とも人材に恵まれ、かつチームの結束が固かったので、彼らの理解と協力さえあれば、この事業は必ず成功すると私は信じていた。

周産期医療の充実という国の戦略に基づき、NICU には高い点数設定がなされていたが、その施設基準は厳しく、都内でも NICU を開設しているところは大学病院などの限られた施設しかなかった。それでも一般的に行って、国が一定の制度を誘導する場合、実際の施設認定は甘くなるものである。

とは言え、賛育会病院規模で NICU を持っている病院は当時、都内には皆無であった。それでも資金力のない賛育会なので、チャンスは今しかない、と私は焦りを感じていた。

私は大阪市内に NICU を開設した病院 (病院名は失念) がある事を耳に挟み、講演で大阪に行った時、その病院を見学することにした。そして、「これならば今の賛育会病院の新生児室に少し手を加え、NICU として施設認可されるはずだ」という確信を持った。

早速帰京して保科部長、新生児担当の長谷川医師にそのことを伝えたが、当初、両先生は頭から私の言葉を取り合ってくれなかった。しかし幸いなことに、両先生とも小児科が赤字診療科であるという危機意識は強く持っていたので、「とにかく現場を見

て、その上で可能かどうかを判断してほしい」と私の言葉を受け入れ、大阪の病院の NICU を見学に行った。

帰ってきた保科先生は開設に自信を持ち、改修のための費用をほとんど用いることなく (とにかく何をやるにもお金はかけられない病院の台所事情だった)、なんとか審査をパスして、無事オープンすることができた。

ところで、小児科自体の規模を大きくすることについては、就任中いつも私の頭の中にあっただが、私としては珍しく一貫して慎重を貫いた。その主な理由は、たぶん将来的に入院患者は減ると予測したこと、小児科医の確保が困難であること、患者の季節的な変動が大きいこと、小児科本体の黒字化は大変難しいと判断したこと、などである。当時の私のこの判断は、決して誤ってい

なかったと思う。一方新生児科は、賛育会病院の産科規模ではますます重要になると考えていた。

NICU の開設によって小児科は黒字を生み出す診療科に変えることができ、賛育会病院の周産期医療の伝統を支え、ますます発展させる大きな力となった。



## 勉強会テーマ「末期がん患者の口腔ケア・在宅でのエンゼルケア」

1月15日(金)17時から、パリアン看護師主催の勉強会が行われた。テーマは「末期がん患者の口腔ケア・在宅でのエンゼルケア」で、千葉、平岩両看護師が発表した。

千葉看護師が自力での口腔ケアが困難な末期がん患者に対するケアやいろいろな工夫などを紹介した。また、エンゼルケアでは、平岩看護師がテクニカルなケアとともに、遺族の気持ちに寄り添ったメンタルなケアも大事で、できる範囲内での家族によるケア参加は、家族の悲嘆の軽減につながるという話をした。今回のテーマは日常業務で経験している内容だが、看護師各々がどのようにケアし、工夫したりしているかを話し合ったことにより、今後の参考になったと思う。

## ボランティア紹介

### 第1回 事務ボランティアの巻

- ・ボランティアリーダー：江口 勇
- ・メンバー：6人
- ・定例活動日：毎月第3土曜日午後1時～
- ・主な活動：パリアン通信の編集・作成、ボランティア活動やパリアン活動に関する事務作業、ボランティア基礎講座やステップアップ講座の企画・運営。2年前から聞き書き(医師や看護師の依頼に基づき、患者さんの話を聞き書き手法により冊子にまとめ、患者さんに手渡す)も活動に入

れている。

昨年7月のパリアン公開講演会では、チラシの



作成や配布、当日の司会や運営などを担当し、講演会の無事開催に貢献した。

また、聞き書きでは、2人の患者さんの聞き書きを行い、患者さんに冊子をお渡しして、大変喜ばれた。(報告：江口)

## ボランティアのレベルアップ、開かれたパリアンの実現などを話し合う

### 1月16日 ボランティアグループパリアンリーダー会開催

ボランティアグループパリアンのリーダー会が1月16日(土)10時30分から、ボランティアリーダーとコーディネーターが出席して開催され、患者さんやご家族への対応のレベルアップやコミュニケーションのとり方など、ボランティア研修の充実や地域に開かれたパリアンの実現のための活動を推進させる取り組みについて、話し合った。



ボランティアリーダー会の会議模様

### 5月14日にパリアン公開講演会の開催決定

地域に開かれたパリアンの活動の一つとしてボランティアが主催する公開講演会が5月14日(土)午後2時~4時に本所地域プラザBIG SHIP 4階多目的ホールで開催されることになった。詳細は次号に掲載予定。

## 「病気で家族の絆のありがたさを痛感」

### ラジオNIKKEI 日曜患者学校 川越厚の「がんからの出発」より



林幹二さん

今回のゲストは、大人の隠れ家「銀座山荘」管理人の林 幹二さん。この方、実はクリニック川越の患者さんで、パリアンの「サロン・ド・パリアン」に参加されている。

がんの発症から今に至るまでの経過を振り返りながら、その時々どんなことを感じたり考えたり、そして今なにを思っているかを2週に渡って放送された。

林さんのがん発見のきっかけは、自転車で転倒・肋骨骨折で撮ったレントゲンに影が写っていたことによるとのこと。厚先生紹介の日赤で、初診で即入院・翌日手術という異例の速さで対応してもらったことが、発病当時の生きることへの絶望感から意欲に変わり、そして今生きている証ではないかと

林さんは述懐している。

3度の冠動脈塞栓術で病状が改善しているように思えた。その後転移が見つかり、この時にはもう絶対治らないと思ったが、医療もどんどん進歩しているので、自分にぴったりあう抗がん剤に巡り合うのではないかと思い、抗がん剤治療を始めた。

しかし、その抗がん剤は延命処置だとわかり、そこには行きたくなかったが、見事にそこにいつてしまったという。

#### 人生60年で死をはずせば今が一番幸せ

病気になって家族の絆のありがたさを強く感じ、今まで当たり前だと思っていたことや子供たちや女房に感謝できるようになった」と林さんはいう。そして、「人生60年の中で死ということをはずせば、今一番幸せだ」と言い切った。

・放送の聴き方：短波放送・ラジオNIKKEI第1：3.925MHZ、6.055MHZ、9.595MHZ  
放送終了後は、ラジオNIKKEIのホームページ(<http://www.radionikkei.jp/inochi/>)、または「日曜患者学校」で検索しても聴けます。

## 医療法人社団パリアン公開講演会「2016年版 訪問看護 来た道・往く道」

■講師：全国訪問看護事業協会事務局長 宮崎和加子氏

第1回 2月26日(金)「これまでの診療報酬改定に見える今後の訪問看護のゆくえ」

第2回 3月4日(金)「地域包括ケアと訪問看護の役割」

■会場：医療法人社団パリアン1階(東京都墨田区立川2-1-9 KHハウス)

■対象：看護師 ■参加費：無料

■申込み・問い合わせ：訪問看護パリアン〈詳細は別紙をご覧ください〉

メール：[kango@pallium.co.jp](mailto:kango@pallium.co.jp) 電話：03-5669-8302 FAX:03-5669-8310

## トピックス TOPIX とぴくす

1月22日(金)17時からデスクンファレンスがあり、看護師、ケアマネジャー、ヘルパー、ボランティアが参加し、およそ1時間のディスカッションを行いました。

今回のテーマは『意思決定の場面での看護師の関わり』で、旅立たれた患者さんやご家族との日々の関わりやケアを振り返りました。患者さんやご家族は、生活の中で様々な意思決定をして日々過ごしています。スピリチュアルペインに関する患者さんやご家族の悩み・苦しみへのコミュニケーションの取り方、寄り添いなど、訪問看護師としてできる事を深く考える学びの場となりました(報告:貫井看護師)

1月28日(木)の羽鳥慎一モーニングショーで「病院で死ぬことは、これからも当たり前なのだろうか」というテーマで、26年間在宅での看取りを支援してきたクリニック川越院長の川越厚医師の訪問診療取材した模様が放映された。“余命が限られている場合で最期は自宅で過ごしたいと思う人”が80%超という現状で、自宅で最期を迎えることは本当に難しいのか、という疑問に答えるために、パリアンの一人暮らしの患者さんが取材を受けてくださった。川越医師は、「がんの痛みや息苦しさは取れるので、一人暮らしの看取りも可能」という。



番組の一場面

## パリアン・スタッフの講演・発表予定(確定分)

	/14		4	
	/1			
	/1		7	
		<a href="http://www.pcr.or.jp/n_vs/vi_w6">http://www.pcr.or.jp/n_vs/vi_w6</a>		
	5/14	8	1	SH 4 BG

パリアンのフェイスブック (<https://www.facebook.com/hospice.pallium>)でも講演予定を随時ご紹介しています。

## 2月のボランティア活動予定

- ・講演会準備会:2月12日(金)午後2時30分~
- ・訪問ボランティア:(訪問ミーティング)2月12日(金)午後1時~  
(活動日)2月4日、5日、8日、19日、22日
- ・サロン・ド・パリアン:2月5日、12日、19日、26日
- ・メモルの集い:2月27日午後1時~2時  
(準備会)2月20日午前11時~
- ・命日カードボランティア:2月18日午前10時~
- ・手作りボランティア:2月1日午後1時~



2 ( )

## 編集後記

2月4日は二十四節気では「立春」に当たります。二十四節気とは、節分を基準に1年を24等分して約15日ごとに分けた季節のことで、古代中国の気候に基づいて作られていますので、日本の気候とはずれが生じますが、農業の目安や時候の挨拶などで日常生活に利用されています◆立春を過ぎたとはいえ、まだまだ寒い日が続いていますし、空気が乾燥してインフルエンザも流行の兆しを見せています。患者さんは風邪やインフルエンザに罹るわけにはいきません◆「ガラガラ、ポツ」「シュシュシュ」これはなんの擬音かわかりますか。そう、うがいと手洗いです。患者さん宅を訪問するパリアンのスタッフは、風邪を引かないよう引かせないように細心の注意を払い、特に今の時期はうがい・手洗いなどをこまめに丹念に行っています。今日も訪問に「行ってきまへす」(I. E)

# がんサロン SAKURA

けらわ ISP



び @G F@ / わつさ さ  
/1 2

びらが



ゆ たかさせ

う きさつ -

せ  
さ だ 向



1 //

-

LNМ

さ さ き

R J .1 3447 61.0

.1 3447 61/.

K j s

jjs am

05 き  
 がん けらわ SAKURA

よ

/ FAX	FAX
けらわ	

<p>び @E F@          / 1 2          わさ さ          HP / 3 6          ぬさ ぬさ /          ぬさ ぬさ よ 01 1</p>	<p>バス路線案内          墨 38 -----          (リハビリテーション病院前)          (両国駅前)          早 24 -----          (東大島駅前) (浅草寿町)          都 02 -----          (錦糸町駅前) (大塚駅前)          門 33 -----          (亀戸駅前) (豊海水産埠頭)          区内循環バス</p>
--	--

2016年版 訪問看護

# 来た道・往く道

訪問看護の  
未来を考えよう

/68. 0.8.

/68. 0.8.

き

史 ゆ わ

0 / 7

/756  
/770  
0.5  
0.11

さ こわ  
さ こわ



ゆ わ

ゆ わ

kango@pallium.co.jp

1

03-5669-8302

Fax 03-5669-8310

さ さ

30

